

式番組のヒューマンデ
ブリ ベル・ガラハ

Ittoh

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「鉄血のオルフェンズ 弐番組つくりました」

鉄血のオルフェンズを見て、ちょっと設定追加して、「弐番組」を書いてみました。
鉄血は、ガンダムで任侠モノという面白いネタでもあるので、テレビシリーズは、2期
を含めて、中々面白かったです。

アニメの方で、壱番組と参番組があつて、弐番組という形での表現がなかつたので、女
ばかりの弐番組を作つた次第です。

人類を滅亡に追い詰めた厄災戦、戦いが集結して三百年。

「ノアキスの七月会議」で登場する、クーデリア・アイナ・バーンスタンの依頼に始ま

る少年兵の多い参番組に、女達の式番組が絡みます。元参番組であつた、ベル・ガラハ
というショタ姐のオリキヤラ設定で、アナザーなオルフェンズを描こうと思ひます。

目 次

鉄血のオルフェンズ 武番組つくりまし

た 1

武番組のヒューマンデブリ 「ベル・ガラ

ハ」 女になることと武番組 5

鉄血のオルフェンズ 弐番組つくりました

仕事のない火星で、食い詰めたガキは、ヒューマンデブリの形で売られていく。あたしもCGSに買われた、ヒューマンデブリの一人で、壱番組の兵隊達が使う、モビルワーカーの整備や支援、それから夜の相手を含めて担当するのが弐番組だ。マルバ曰く、壱番組が、女に嵌つて使えなくなるくらいなら、自前で用意したほうがマシということらしい。

あたしらの下には、あたしが昔所属していた、参番組つてガキ共が居て、最前線や凹といつた過酷な任務をこなしている。9歳で拾われて、「阿頬耶識」の手術を受けて、参番組で働いていた。ガキから女に変わるまで生きていれば、弐番組に上がつて、壱番組の男達の相手をすることになる。

ワーカーマシンの整備を終えて、今日も御勤めか、シャワーを浴びて着替えると、鏡の前でポーズをとつてみる。鏡つていうのは、正直なものだ、ガリガリだつたあたしは、生き残りはしたものの、女としてのラインは貧弱だ。赤い髪に陽に灼けたような肌は、健康的って言うより、幾つもの傷が重なつて斑みみたいになつていた。あたしらは、壱番

組を毎晩三人相手すれば、ノルマは終わりだ。ニーナやアディみたいに、男好きする連中は、集られると翌日の仕事に困るので、一人一回周る程度にマルバが制限を設けていた。そんな男を迎える部屋に、自分の名を入れた札を入れて、ベッドと小さな机だけが置かれた部屋に入る。

あたしらは、そこで男が入つてくるのを待つ、毎日の日課みたいなモノだ。

「あらあら、また来たのかい、トド」

「いけねえのかよ」

拗ねたように言うが、トド・ミルコネンは、このあたりが可愛いものだ。基本的に壱軍の連中はにとつて、あたしらヒューマンデブリの女は、玩具みたいなものだ。持ち主が社長なんで、多少の遠慮はあるが、式番組の扱いは雑なものだ。

そんな中では、トドはマシな方だ。女を女としては扱つてくれるし、CGSの女衒を担当しているだけあって、女の扱いは上手い。式番組の女は、たいていが、トドが買つてきた女が多い。あたしのように、ガキの時にCGSに買われるた女は、そんなに多くない。

「まあ、いいさね、殴られたのかい」

頬が紅く腫れていた。

「ちょっと待つてな」

部屋の水差しから、ハンカチに水を付けて、トドの頬にあててやる。

「おめえ、相変わらず、いい女だな」

「ま。このぐらいできないと、ノルマはこなせないからね」

ハンカチを当てながら笑って、トドの膝に乗つかるようにして誘うと、そのままトドは、あたしを押し倒した。トドは、ねちっこくて、結構上手いから、あたしの身体でも、善がつて気をやつてしまふ。

「トド、悪いけど、時間だよ」

三人のノルマをこなすには、一時間で一人相手にしないと、あしたがきつい。

「大丈夫だ。今日は、一番組も十人くらい死んだからな。ここには来ねえよ」

「トド。だからつて一晩は、許してくれよ。明日がきついからさ」

「栄養剤を買つてあるよ」

「おい、」

そのままトドは、朝まであたしを抱き続けやがった。

「トド。ほんとに朝まで犯りやがつて、」

固いマットに身体を預けながら、寝かしてくれなかつた男に愚痴る。トドは手早く身支度をして、ポケットから栄養剤を出して机に置くと、部屋を出していく。

「悪い、またな」

トドは、そのまま部屋を出ていく。楽な仕事が多いといつても、壱番組だつたPMCの傭兵だ、作戦で死ぬことも多い。壱番組が十人死んだとなると、参番組は二三十は死んだかな。シャワーを浴びて、栄養剤を飲んで、ツナギに着替えると、参番組の建物に寄つて行く。

武番組のヒューマンデブリ「ベル・ガラハ」 女になることと武番組



男の名は、オルガ・イツカ。

プラチナブロンドに褐色の肌、鍛えている体は、ぞくぞくする位に綺麗だ。三白眼で睨みつける目は、当時はまだ可愛くて、ここから抜け出したい、そんな想いに溢れていた。



あたしは、そのまま押し倒して、オルガ・イツカと契りを交わした。



倉庫から奥に下る階段があつて、階段を下りた先には、このCGSを支えるエネルギー・プラントがある。「厄災戦」で使われた、エイハブ・リアクターを搭載したモビル・スーツを、マルバが発掘して動力炉として使用している。現在はサブになつている原子力電池も、CGSを賄える動力だが、エイハブ・リアクターだと、待機動力で賄える。CGSの燃料費は、非常に安いので、インフラ設備に余裕がある。

オルガは、暖かいから、ここで良く寝ていた。ま、それを知つていたから、ここで寝ていたオルガを押し倒せたわけだ。

相変わらず、さらさらな髪だ。最近は、毎日シャワー使つてているのかな、ツンとするような匂いが無い。髪を撫でていると、オルガが目を覚ます。

「起_あこしたかい、オルガ」

「姫_あさん」

「相変わらず、襲いたくなるくらい、良い男だねえ」

「やめてくださいよ、姫_あさん」

「はは。元気そうで良かつたよ」

「落ち込んじやいられないんで、でも、すんません姫_あさん、シーナとアリアも、」

「ああ、聞いたよ。残念だつたね」

「はい、後、三月だつたのに」

「あんまし、傷つくんじやないよ、生き残つた奴が多いんだからね」

「わかつてます、姉さん」

「姉姐つて言うけど、あんたとの契りは7・3の親子だ、あんたが親分なんだよ、オルガ」「でも、姉さん。俺は五分でつて」

「あたしは五分は嫌いで、人の上に立つのも御免だ、悪いけどあたしも背負つて貰うよ」

「姉さん、」

起き上がりつたオルガの頭を、あんまし豊かでない胸に包んで撫でる。

「いいんだよ。子供なんだ、急ぐことは無い。あたしが勝手にあんたを愛して、契つて、戦つているだけさ。良いよね、オルガ・イツカ」

「はい。姉さん」

やつば、決断する男はいいね。軽く、口づけするつもりが、結構、本格的にやつちまつた。

「、ゴメン。泣つさかつちまつた」

「構いませんよ。姉さん、望むところです」

「ありがと。オルガ」

本格的なキスを返されて、ちょっと腰が厳しくなったけど、なんとか踏みとどまれた。

「仕事ですか、姉さん」

「多分ね。ニーナが、参番組を指名した仕事が入ったって言つてたんだ」「参番組をねえ、なんだか、ヤバそうですね」

「ああ、あね気をつけな、オルガ」

「はい。あね姉さんツ」

そして、オルガ・イツカは、駆け出して行つた。漢と書いて「おとこ」って読む、そんな良い男だよ、オルガ。